

サダコのおり鶴

～ 9.11と3.11を結んだ祈り～



作・絵
ERICCO

サダコのおり鶴

～ 9.11と3.11を結んだ祈り～



作・絵 ERICCO

ここはアメリカ、^{せ かい ぼ う え き}世界貿易センタービルがあった向かいにある
トリビュート センター (tribute center) ^{き ねん かん}記念館です。
ここに^{に ほん じん}日本人サダコから^{おく}送られた^{ちい}小さな^お折り鶴が^{つる}飾られています。



サダコの折り鶴, 広島市, 1955年
Sadako's Crane, Hiroshima, 1955

“ Please treasure the life that is given to you.

Please experience all the things I could not experience in my life.

I entrust a small heart of compassion (Omoiyari) to all of you.

It is my belief that my small paper crane will enable you to understand other people's feelings as if they are your own.”

Sadako Sasaki, 1955

”どうか、あなたの命いのちを大切たいせつにしてください。

どうか、私わたしの分ぶんも生きて、これからたくさんいのことを経験けいけんしてください。

私わたしはこの小ちいさな折おり鶴づるがあなたに届とどくように、心こころから気持きもちちを込こめました。

この小ちいさな折おり鶴づるは他ほかの人の痛いたみや悲かなしみも

まるで自じ分の事ことのようかんに感じて、

あなたと一いっしょ緒のに乘こり越こえてくれると信しんじています。

1955年ねん、ササキサダコ”



2001年9月11日、前代未聞の事件が occurred しました。

アメリカ同時多発テロです。

飛行機に乗っていた人たち、ビルで働いていた人たち、

そして救助にあたった警官や消防士も、

たくさんの命が犠牲になりました。

この信じられない出来事に人々は衝撃を受けました。



ビルが崩壊した後の光景は本当におそろしいものでした。

まだガレキの下に埋まっている人々を助けるため、

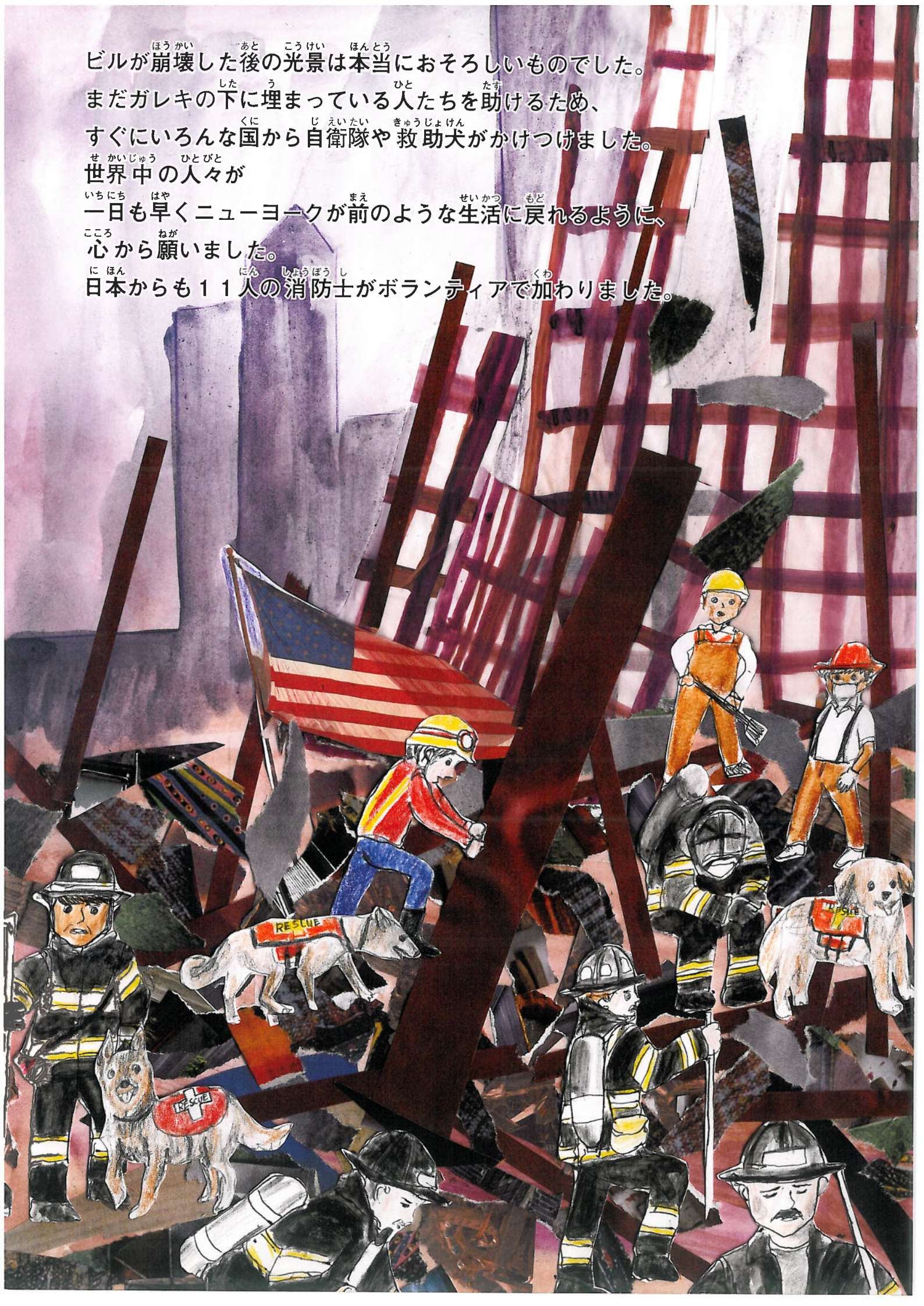
すぐにいろんな国から自衛隊や救助犬がかけつけました。

世界中の人々が

一日も早くニューヨークが前のような生活に戻れるように、

心から願いました。

日本からも11人の消防士がボランティアで加わりました。



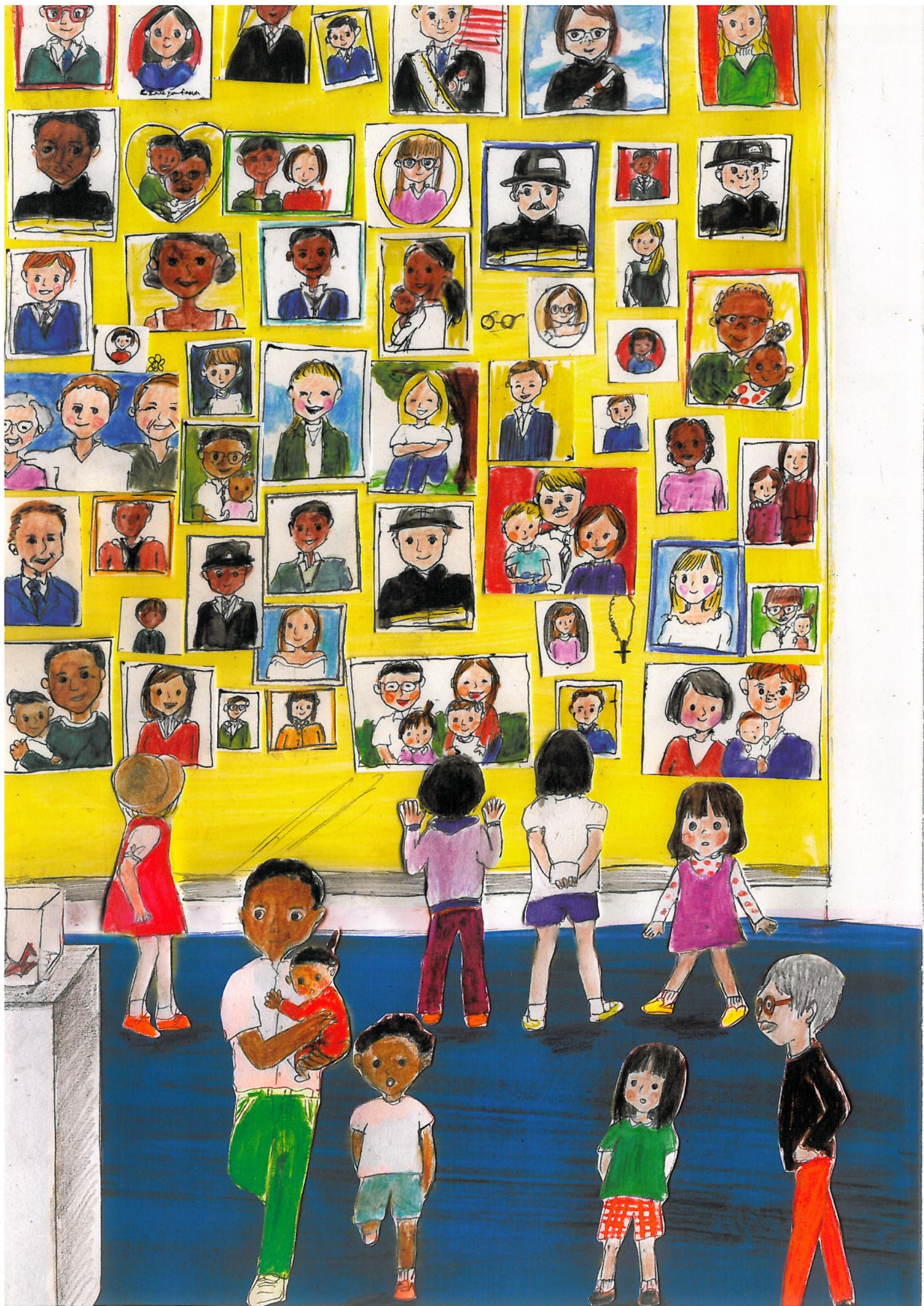




つる
サダコの鶴はそのときにまちひとたす
にほんうみわた
日本から海を渡ってやってきたのです。

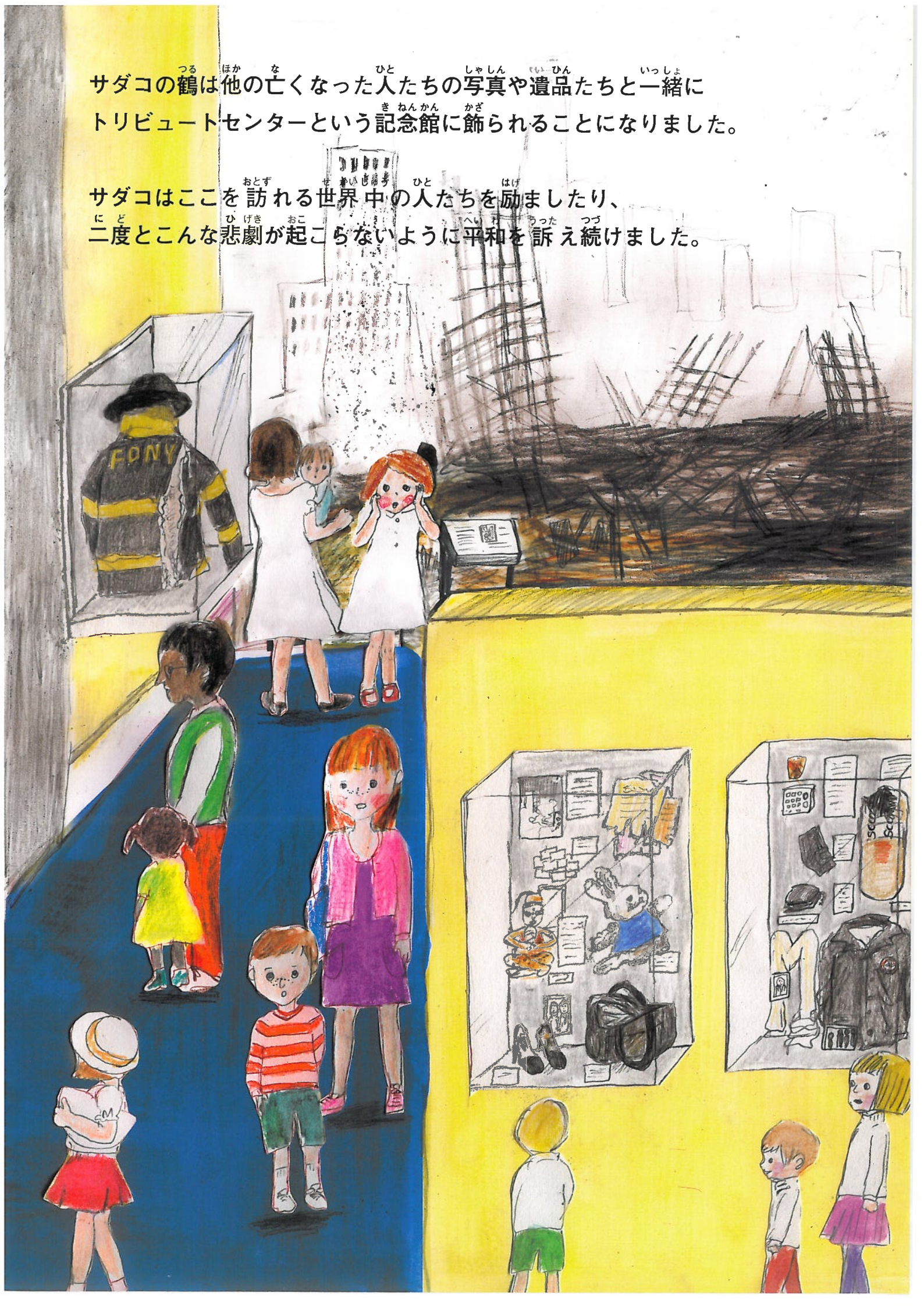


アメリカ国民こくみんだけじゃありません。ビルがあった跡地あとちには世界中せかいじゅうからたくさん
 さんの手紙てがみや祈りいのりが山ほどやまほど届とどいていました。
 みんなの願ねがいは同おなじです。
 どうか、平和へいわな世界せかいになってほしい。



つる ほか な ひと しゃしん たい ひん いっしょ
サダコの鶴は他の亡くなった人たちの写真や遺品たちと一緒に
トリビュートセンターという記念館に飾られることになりました。

おとす せ かい じゅう ひと はげ
サダコはここを訪れる世界中の人たちを励ましたり、
に ど こん な ひ げ き お こ ら ない よう に へい わ を つづ け まし た。



ニューヨークの街は、
みんなが手を取り合い、一緒に前を向いて頑張ったおかげで
また少しずつ回復していきました。



ほか な ひと いっしょ まち
サダコも他の亡くなった人たちと一緒にニューヨークの街を
げん き み まも
元気に見守っていました。



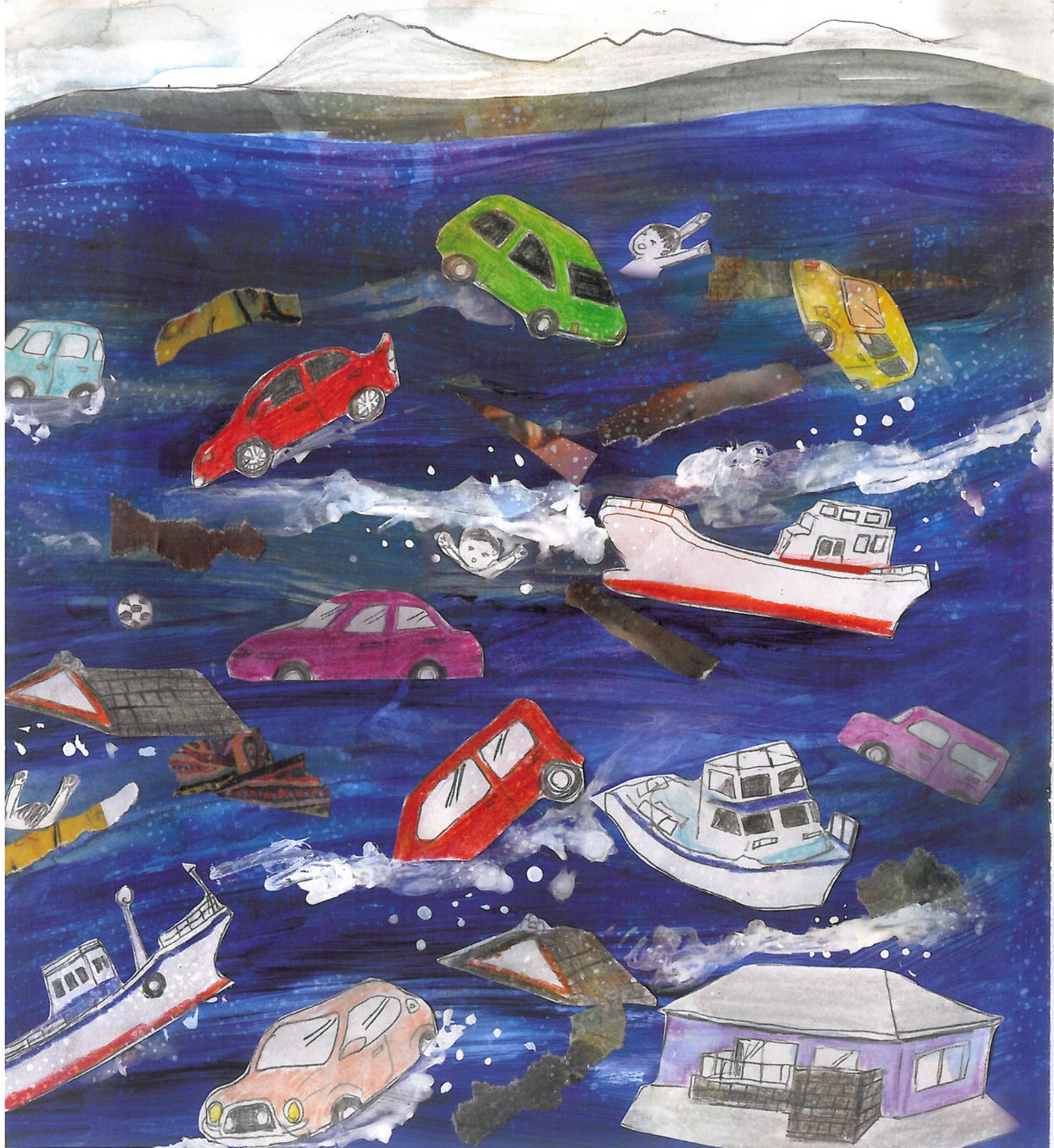
2011年3月11日、今度は日本で東日本大震災がありました。

遠く離れた日本からの深い悲しみは、海を越え、

サダコ^{ばしよ}の場所にも痛いほど届いていました。

サダコはすっかり元気をなくし、毎晩トリビュートセンターが閉まると

ふるさとの日本のことを思い出してはシクシク泣いていました。





そんなとき誰かがサダコに言ったのです。

「一緒に日本へ行こう！」

君がここに来てくれたように今度はみんなが日本を応援しに行こうよ！」

「私も行くわ！」

「僕も一緒に行こう！」

まわりの遺品たちが次々に声を上げました。



サダコはびっくりしましたが、すぐに決めました。

「そうだわ、泣いてたって始まらない、行きましょう！」



しゅっぱつ
「さあ出発だ！」

みんなはいっせいに千羽鶴せんぱつの
と飛び立ちました。

PETER MORA DAVID E. REBER ASHLEY SMARY
REBECCA PERE GLENN WILSON SUSAN PATRICIA GAMMEL
ALEX MANHEIMER YVES KIM RANU KAMBU PATRICK
LIZANNE CAMPBELL
T. QUELL PR





BY DANJO LIM
CHRISTOPHER R.
AHMA SA

まちを越え、山を越え、海を越え、
風になり星になり、、、
日本につく頃にはサダコたちは流れ星になっていました。

震災で亡くなった人たちも
サダコたちの楽しそうな姿を見て、
いつの間にかみんな一緒に空を飛んでいました。





それはまるで天を流れる流れ星のようでした。

地上にいる人たちはみんなが見とれました。

それはそれはほんとうに美しいものでした。





なが ぼし 流れ星になったサダコたちは福島県にある開成山公園にたどり着きました。
そして一つの大きな折り鶴になったのです。

サダコたちは今日もこの公園で元気に遊ぶ子供たちを
うれしそうに見守っています。

こんな悲劇が二度と起こらないように。
世界が幸せでありますように。





● あとがき ●

もし自分の家族や大切な友人が突然こんな事件や天災で犠牲になってしまったら・・・
体験した本人しかわからないのかもしれませんが、その気持ちは考えただけでも想像を絶します。
東日本大震災があった時ニューヨークにいました。日本はこんなに悲惨なことになっているのにニューヨークはいつもと同じ光景が過ぎてゆきます。
幸い私の家族や友人たちはみんな無事だったのですが日本のことが頭から離れずインターネットで記事や動画を見ては、落ち込みました。
私も何かやりたい、自分は何ができるのか。
そんなことをずっと思っていた矢先、今回絵本のお話をいただき二つ返事で引き受けさせていただきました。

● 絵本を制作するにあたり ●

改めて、9.11が起こった当時のことを調べたり、実際にグランド・ゼロに行ってきました。
その場所に行くだけで、今でも言葉にならない悲しさが残っています。
広島や長崎の原爆とすごく似ていると感じました。
罪のない人々が、醜い争いに巻き込まれて犠牲になる。
痛み苦しみながら死んでいかなければならない。
こんなことは二度とあってはいけません。
今回の東日本大震災は戦争やテロとは違いますが震災で犠牲になった遺族の方々の悲しみは同じです。
人が亡くなる悲しみはそう簡単には消えるものではないと思いますが、テロから11年がたった今、ニューヨークの街は当時より見違えるほど復興しています。
東北の被災地には放射能のことや復旧作業など、

まだ問題がたくさんありますがどうか夢や希望を持って生きて欲しいです。
私たちは生きてると、いいこともあるし、悪いことも起こります。
今日は生きているけど明日突然、不運があって死んでしまうかもしれません。
先のことは誰もわかりません。
でも私たちができることは、このような出来事があったことを胸に刻み、亡くなった人の分も生きること。
自分の命あるこの今に感謝して一日、一日を一生懸命過ごすことだと思います。
最後にこの絵本を描かせていただくにあたって、私も自分のこれからの生き方などを考えるともいい機会になりました。
この絵本でサダコの旅は終わりになるように、そして東北のみなさんがまた心から元気に笑える日が来るように心から願っています。

● プロフィール ●

ERICCO / 本多恵理
長崎県出身
デザイン専門学校卒業後、デザイン会社勤務。
現在フリーのアーティスト・イラストレーターとしてニューヨークを拠点に活動中。
<http://ericco.mods.jp>

「禎子の折り鶴」から「サダコの折り鶴」へ

2歳の時に広島に投下された原爆に被爆し、それから10年後に被爆が原因の白血病を発病し、8ヶ月の闘病生活の末、1955年10月25日、12歳という短い生涯を閉じた少女がいました。その子は、広島市の平和記念公園内の「原爆の子の像」のモデルになりました。

その子の名は佐々木禎子さん。

禎子さんは、その闘病生活の中で、鶴を千羽折れば、願いが叶うという言い伝えを知り、服用している薬の薬包紙、折り紙などを利用して、鶴を折り続けました。自分の病気が早く治ってほしいという願いをこめて…そして、その願いは、もし戦争がなかったならば、自分もこうした病気にならなかったのに、世界から戦争がなくなればいいという平和への祈りになっていったそうです。

2001年9月11日米国東部標準時午前8時46分米国同時多発テロ（9.11テロ）が発生し、世界貿易センター（WTC）ビルが爆発炎上するなど、多くの犠牲者が発生し、世界中が大きな衝撃を受けました。

その後ある日、WTC跡地グランド・ゼロの鉄柵に千羽鶴がかけられているのをトリビュートWTC ビジターセンターの職員が発見したそうです。その職員は、折り鶴が何を意味するか分からず、センターにこれを持ち帰りました。それが日本人遺族の目に止まり、「誰かが追悼のために鉄柵にかけてくれたんだ…よし、私たちも折り鶴を折ろう!」。こうした話が、あの禎子さんのご令兄佐々木雅弘氏の耳に入り、同氏が大切に保管していた禎子さんの折った遺品の赤い折り鶴がトリビュートセンターに贈られたのです。平和への祈りを込めた「禎子の折り鶴」が太平洋を越えて、ニューヨークに渡って行ったのです。

この物語は、石倉欣二氏作「海を渡った折り鶴」（株）小峰書店発行）という絵本になっています。

2011年3月11日午後2時46分、東日本太平洋沖を震源域とするマグニチュード9の大地震が発生し、それに伴う巨大津波が東日本の太平洋岸に襲いかかり、それに続き福島第一原子力発電所の爆発事故が発生しました。この大災害による甚大な被害の報に接した9.11テロの遺族で構成される9.11家族会のリー・イェルピ会長は、9.11テロから11年に亘る家族の経験が被災地の方々の心のケアに役立てることがあるのではないかと、被災地訪問

を思い立ちました。

9.11テロの標的となったWTCで被災した人々を救助するために、燃え上がるWTCに沢山の消防士が乗り込んでいきました。イェルピ会長のご子息もその一人で、その救助活動の最中に、WTCが崩壊し、沢山のひと々と共にイェルピ会長のご子息も帰らぬ人となってしまったのです。

今回の震災による津波等により、多数の人々が尊い命を奪われ、救助活動に当たった方が犠牲となった例も多数報告されています。ついさっきまで元気でいた身近な人を災害でなくした人々の心の傷は深く、いつまでも心の中に残るものである。そうした方々に寄り添い、悲しみを分かち合って、一日も早い復興の役に立つことができれば、ということから、9.11家族会の方々による被災三県への訪問が企画されたのです。

来日に当たり、彼らは幅約90cm、高さ約55cm、奥行き約40cmの鋼鉄製の折り鶴を飛行機に乗せて運んできました。平和への祈りを込めた禎子の折り鶴に接した家族会の方々が、福島県復興の祈りを込めて作った復興の折り鶴です。「禎子の折り鶴」が米国人の手により「サダコの折り鶴」になって、日本に戻ってきたのです。

復興の折り鶴は、9.11家族会の要望で、被災した福島県民にとって、最も便利な場所ということで、郡山市に寄贈されることとなり、その協力により、同市開成山公園がその設置場所に選定されました。この贈呈式・地鎮祭が行われた2012年10月25日は、奇しくも禎子さんの58回目の命日でした。

そして、12月23日、開成山公園の一角に、サツキの植え込みに囲まれた中に、高さ1.7mの白御影石の台座に「サダコの折り鶴」を載せた復興の折り鶴のモニュメントが完成しました。この日、現地において、米国日本人医師会副会長柳澤・ロバート・貴裕氏、ニュージャージー州イングルウッドロータリークラブ（RC）次年度会長柳澤育代氏、原正夫郡山市長、丹治一郎郡山商工会議所会頭、佐藤栄佐久元福島県知事、そして、伊東孝弥会長以下郡山西RC会員らが出席し、冬晴れの空の下、復興の折り鶴（SOARING CRANE）の除幕式が行われました。式では、禎子さんの甥御さんでシンガーソングライターの佐々木祐滋氏が作曲し、歌手のクミコ氏が歌う「INORI」のメロディをバックに幕が取り除かれました。冬の被災地の青空に「サダコの折り鶴」が羽ばたいた瞬間でした。



貴裕氏は、米国日本人医師会副会長として、東日本大震災直後、被災者に対する医療支援のため、いち早く来日し、医師として被災地医療に尽力しました。その支援活動を通して、被災地における心のケアの重要性を実感し、かねてから親交のあった福島県立医科大学医学部神経精神医学講座の丹羽真一教授による相馬地区の心のケアプロジェクトに関与することになりました。そして、丹羽教授が相馬市に心のケアセンター「なごみ」を立ち上げるに当たり、備品の提供支援を企画したのが、貴裕夫人の育代氏が所属するイングルウッドRCと同クラブが属する国際ロータリー第7490地区でした。同クラブが相馬における支援活動を開始するに当たり、育代氏の父君の友人佐藤栄佐久元福島県知事に相談が持ちかけられ、同氏が名誉会員として所属していた郡山西RCに声が掛かりました。こうして、郡山西RCが日本でのホストを務め、同クラブが所属する国際ロータリー第2530地区（当時のガバナー根本一彌氏）がその支援に当たるようになったのでした。

このような日米の二つのRCの協力関係がきっかけとなり、9.11家族会による被災地訪問が実現したのです。この訪問には、RCだけでなく、米国の様々な団体、機関の協力がありました。巻末にその際に寄せられた関係諸団体のメッセージを掲げました。

大震災以来「絆」という言葉が多く使われるようになりました。その言葉に込められる意味は人様々だと思えます。今回の復興の折り鶴を巡る一連のできごと、[絆]を象徴するものでしょう。復興の折り鶴モニュメントが完成した際には、是非福島県の多くの方々にご覧になって戴き、世界中が福島県の復興を願っていることを知って戴きたいものです。

そうした願いを更に広く語り継ぐために、絵本「サダコの折り鶴」出版が企画されました。制作に当たったのは、育代氏の知人で、日本からニューヨ

ークに留学中のイラストレーターERICCOこと本多恵理氏（長崎県島原市出身）です。育代氏の呼びかけに賛同し、無償で絵と物語を提供してくれました。

様々な絆と縁（えにし）から生まれた、この絵本は、福島県内の図書館、全幼稚園、全小学校に寄贈されます。また、米国でも多方面に寄贈されることになっています。

ところで、「禎子の折り鶴」の材料になった赤い紙は、1955年3月にアメリカから無償供与された白血球の増加を防ぐ薬品メトトレキサートの包み紙だそうです。その魂が、9.11家族会の手によってWTCビルの鉄骨を材料にした「サダコの折り鶴」になって、禎子さんの58回目の命日に被災地福島に舞い降りたのでした。こうしたことにも折り鶴に込められた深い「絆」を感じざるを得ません。

最後に、地鎮祭及び除幕式にご尽力頂いた郡山市まちづくり政策課並びに公園緑地課の皆様、そして、本書出版にあたりご協力頂いた街こおりやま編集長伊藤和氏、不二印刷株式会社に心から感謝申し上げます。

国際ロータリー第2530地区
郡山西ロータリークラブ

2011-2012年度会長 高橋金一





東日成団

United States-Japan Foundation



American Airlines, Japan Society, Rotary Club, and US-Japan Foundation join Japanese Medical Society of America and 9/11 Tribute Center again for the Second Outreach Mission to Japan

In August, American Airlines will fly the second team consisting of the 9.11 community members (family members, survivors, rescue and recovery workers, residents of the WTC neighborhood), JMSA, Mount Sinai Global Health, and Rotary to Japan to share their personal stories of transformation and give hope to survivors of 3.11 earthquake disaster in Tohoku, Japan, starting with school children and teachers.

Two years after the Great East Japan Earthquake, Tsunami, and Nuclear Power Plant Accident, disaster stricken areas continue to suffer the consequences. In particular, children's emotional well being is a concern as many continue to live in temporary housing away from their communities. We can empower school communities with self-motivation toward recovery by sharing personal stories of 9/11 community members' recovery over the past 12 years. After our successful first mission in 2012, we have had many requests to come back again. Outreach visits offer powerful experiences for everyone involved, providing emotional support through face to face exchange and connection. The inspiring meetings are highly effective in communicating the psychological responses to disaster, and can lead to the enhancement of children's resilience and their active coping.

JMSA and Rotary are arranging this program in response to the September 11th Families' Association's strong desire to share their experience as well as expressed local welcome for emotionally bonding encouragements by our colleagues in Japan. "Through our experiences of community re-building in the aftermath of the September 11th tragedy in New York, we would like to be supportive of Japan's long-term recovery efforts," said Lee Ielpi, the President of September 11th Families' Association. JMSA has been supporting long term recovery efforts in Tohoku, especially in mental health, since April 2011. With our continuing efforts, we hope to bring about a sense of international community to people who may begin to feel forgotten, even within Japan.

"At American Airlines, supporting children and their families is a primary focus of our Kids in Need program," said Bernie Willett, American's Director – Citizenship and Community Programs. "We're proud to partner with JMSA for the 2nd consecutive year to join their mission to give hope to children in Tohoku, Japan, who are still suffering from 3/11 disaster." George Packard, the President of United States-Japan Foundation, "extends every good wish for the success of the project."

JMSA greatly appreciates the good will and generosity of the collaborating partners. Special thanks go to American Airlines for generously providing roundtrip tickets from New York to Tokyo, Rotary Club for local arrangements, Japan Society for program development, and United States-Japan Foundation for funding support of this program. We are much honored for recent accolades from American Psychiatric Association, Asian American Federation, Hamilton-Madison House, Lions Club, and more for our community outreach efforts.



絵本 サダコのおり鶴

平成25年(2013)6月27日発行

発行所 〒963-8001

郡山市大町1丁目2-17大ービル1F

☎ 024-923-0847 FAX 024-939-5678

発行人 郡山西ロータリークラブ

会長 伊東孝弥

編集人 郡山西RC 高橋金一